

esprit

日本武道学会剣道専門分科会会報 [2007]



会長挨拶 杉江正敏（大阪大学）

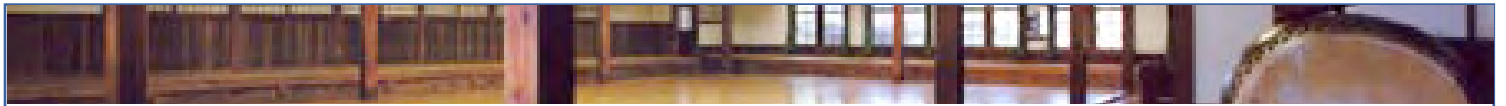
§ 剣道指導の心構え

『剣窓』（全日本剣道連盟広報誌）本年4月号によれば、平成15年から三年がかりで長期構想企画会議で議論されてきた「剣道指導の心構え」が3月に最終決定されることが報じられています。また、同会議の最終報告（5回目）が企画会議議長 加賀谷誠一（連盟副会長）氏の名のもとに掲載されています（文責、作道正夫氏）。また、4回目報告では文責を大保木輝雄氏が担当し、剣道の歴史過程を繙きながら竹刀打ちにおける「一本」と刀剣技法における一刀を同氏の近世伝書研究を踏まえ解説されています。この2編の報告を読んで感じたことは、我が剣道専門分科会会員の同会議委員としての

先見性と歴史過程の捉え方の的確性でありました。

まず、特筆すべきは、歴史認識としての竹刀と刀剣の異同を明確に把握し論を展開されていることでしょう。これは本学会剣道専門分科会が連盟と協力関係をむすび総力をあげて、学会における研究成果をまとめ『剣道の歴史』を発刊することができたことが幾分かの貢献をしているものと考えます。私の私見ではありますが、他の学会などと諸連盟は研究と実践が乖離しやすく、「科学的合理性がない」、他方は「それは理想論だ」などと、まとまりにくいことが間々見受けられます。

とくに、私が今回重要と認識したのは、作道さんが「剣道の身体技法の系譜—斬突から打突へ—」の項で、……こうして「斬突」と「打突」の違いこそあれ、その術理は「双手剣の制約性（理—1本の剣を両腕で操作する）」による防禦と攻撃とが一体となって働く「攻防一如」の剣捌きの継承と、「点（剣先）と線（刃筋）と面（鐙—表裏）」の使い方として受け継がれ、固有の時間・空間と、対人運動の論理（術理）の7～8割方が継承されていったのです。……



という指摘です。現代の試合でよく見られる刃筋の正しくない打ち方や鎧を意識して使われる「摺り上げ」という技法などについて、自然科学方面（力学・生理学など）からのアプローチがなされ、正しい打ちと、いわゆる「平打ち」との刃筋の方向と手の返り方の違い、払い技と摺り上げ技の異同などについて分科会が中心となって、指導・自然・人文の三方向から検証されることが期待されます。

§ 幼少年に対する普及奨励と指導法

剣道の歴史を回顧すると、近世における藩校教育でも剣術を開始するのは12～13歳頃からが普通でした。また、近代になっても特に文部省は体育・生理学的な見地から、旧制の中学生（師範学校生）以降の教材と見做しておりました。

小学生が民間道場の練習生として体育・スポーツ誌面に登場するのは昭和に入ってからであります。ご承知のように小学校武道は昭和14年に準正課となり16年に正課となります。全国各地でさまざまな授業実践が繰り広げられますが、なにせ戦時中のこととて、17年の後半からはこのような実例の報告はほとんど姿を消します。12年頃の準備段階から数えても5年ばかりの実績です。しかし、戦後の少年剣道の復活は、この頃の遺産を基盤に展開されたものと思います。因に私が剣道を始めた昭和28年頃、小学校の物置の一番奥に隠してあった20組位の少年用の剣道具（竹胴）を引っ張り出し、戦前、近在の小学校の巡回指導を担当された五段の先生（50歳代）に指導を受けました。小学校武道は、6年生までは木刀による指導が原則でしたが、各地から剣道具着用を認めるよう、たびたび要請が出されております（尋常高等科から）。この時代でも小学生に興味や関心を持たせながら、木刀による素振りと基本形に限定した指導はなかなか困難なことであったことがうかがわれます。

幼少年（含父兄）の要望や関心は時代とともに変化します。これらのニーズを社会科学的に調査研究しながら、過去の実践例を歴史的に分析し、各地・各校・各人の指導例を検証しながら、剣道の伝統的文化性が損なわれない方向で、分科会がチームを組み何らかの提言がなされることが急務と考えます。



第39回大会 専門分科会企画指導法研究会 報告

演 題： 第一回東京都形剣道大会報告 —実施の経緯と今後の課題—

演 者： 加藤浩二 先生（東京都剣道連盟常任理事） 実演補助：井上豊先生（東京都剣道連盟）

日 時： 平成18年9月7日（木）15：40～17：10（90分。質疑応答を含む）

場 所： 国士舘大学 多摩校舎 ダンス場

経 緯：

本企画は第37回大会から「木刀を使用する剣道指導法の意義を探る」というテーマで取り組まれ、今年で3回目を迎える。1回目は、杉江正敏・大矢稔・佐藤成明の三氏によって、それぞれ「剣道の指導における形（木刀）練習の導入と問題点」・「木剣による技の習得課題—日本剣道形からのアプローチ」・「木刀による剣道基本技稽古法の成立事情」と題した報告と提言がなされた。2回目は平尾京一氏から「木刀を用いた剣道指導法—柳生中学校の伝統・木剣体操」と題し、奈良市立柳生中学校（文部科学省指定武道指導推進校）の取り組みについて、現場からの事例報告がなされた。第3回目にあたる今回は、剣道の形問題に組織として取り組んでいる東京都剣道連盟にその事例報告をお願いした。

内 容：

東京都剣道連盟では、平成14年、戦後剣道50周年を契機に、競技スポーツとして推進されてきた現代剣道の在り方を問い、「剣道の根本となる精神性」を再考する意味で研究委員会が組織され、直心影流「法定」と東京高師「五行之形」を選定しそれらの稽古に取り組みされた。このことを出発点とし、16年には形剣道大会の実施が企画され、17年12月11日に第1回東京都形剣道大会が、18年2月12日には第1回東京都少年剣道大会がそれぞれ開催された。研究会設立当初からこのことに関わってこられた加藤浩二先生に、「五行乃形」「法定」の実演を交えて上記活動の報告をしていただいた。

(1)東京都剣道連盟が「五行之形」と「法定」を選定し、それらを継承するために活動を開始した理由。

(2)「五行之形」及び「直心影流法定」実演

(3)形試合実施の経緯

(4)形研究会・講習会の実施経緯

(5)形試合の評価

(6)今後の課題と提案

※なお、本講演の詳細や質疑応答については、『武道学研究』第40巻第1号を参照ください。



「五行之形」及び
「直心影流法定」の実演風景

平成18年度 研究会 報告

日 時： 平成18年12月22日

場 所： 早稲田大学人間総合研究センター分室（高田牧舎ビル2F）

経 緯：

本年度研究会は、当初平成18年12月2日（土）に明治大学において開催する予定であったが、その後演者として予定していた会員がアジア大会（ドーハ）に役員として急遽派遣されることになり、幹事会の了承を経て下記のように変更した。

平成18年12月22日（金）に早稲田大学人間総合研究センター分室（高田牧舎ビル2階）において「日本の身体—近世から近代・現代へ」をテーマとして「早稲田大学スポーツ文化研究所研究会」が開催されたが、同研究会にパネラーとして当分科会・大保木輝雄幹事長（埼玉大学）が「剣術・撃剣の身心技法」と題して登壇・発表されるので、早稲田大学スポーツ文化研究所の御厚意もあり、これに武道学会員および剣道専門分科会会員の参加を得ることで、今年度研究会に替えた。

研究会次第：

司会：石井昌幸氏（早稲田大学スポーツ科学学術院・助教授）

発表① 「剣術・撃剣の身心技法」

大保木輝雄氏（埼玉大学教育学部・教授）

発表② 「柔術・合気道の身体技法」

志々田文明氏（早稲田大学スポーツ科学学術院・教授）

ディスカッション「日本の身体—近世から近代・現代へ」

大保木輝雄氏（埼玉大学教育学部・教授）

志々田文明氏（早稲田大学スポーツ科学学術院・教授）

岡田桂氏（関東学院大学文学部・専任講師）



なお、当日は、33名の参加があり、うち9名が武道学会員の参加であった。

〔以下、大保木輝雄氏・発表要旨〕

剣術・撃剣の身心技法 — 剣道の不易と流行 — 大保木輝雄（埼玉大学）

1 歴史的視点から剣道という文化をどう見るか

(1) 戦国時代の戦（いくさ）の場 → 命がけの場（格闘術）

総合武術

「武士（もののふ）の 学ぶおしへはおしなべて 其の究（きわまり）は死のひとつなり」

（塚原卜伝1489-1571）

鉄砲の伝来（1543）、剣法の組織化・体系化、殺人刀・活人剣

「予は諸流の奥源を究め陰流において別に奇妙を抽出して新陰流を号す 予は諸流を廃せずして諸流を認めず」（上泉信綱1508-1577）

(2) 近世武芸の勝負（対峙）の場 → 真剣の場（芸道）

伝書の成立、剣術の独立・階層化、型（形）の成立、剣術の理論化

用具の改良、試合（仕合）の流行、武士の剣術・農民の撃剣、流派の増加



- (3) 近代剣術(剣道)の場 → 一本の場(競技)
 流派の解消と競技システムの開発
 日本的な精神性を反映したスポーツ的「武道」の創出
 西洋思想に基づく「柔道」の発明をモデルとした「剣道」を創出
 剣道の教育教材化に腐心
 交剣の場(勝負の場)に「いのち」の実相(不易なるもの)を見、勝負の哲学が構築された

2 組太刀(型)から撃剣、そして剣道へ

- (1) 組太刀稽古の成立 流祖の「一刀」(極意太刀)を原型として体系化
 基本の一刀と極意の一刀は同じ運動だが内容が全く違う
 技術を成立させている考え方: 一撃必勝、攻防一致
- (2) 撃剣の成立 組太刀が基本(理)でその応用が撃剣(事)
 事理一致、打突部位の制定、「一刀」から「一本」へ
- (3) 剣道の成立 撃剣試合(競技)が中心、新たな統一剣道形の制定
 「機・気」を媒介として「いのち」の本質を感得する術が剣術

3 型の身心技法と剣道(撃剣)の身心技法を考える

- (1) 新陰流(型)の技法・直心影流(型+撃剣)の技法・試合
 剣術(撃剣)の技法・勝負技法・表現技法・内観技法といった三つの視点から捉えることができる。

>新陰流の技法

後に引かない、一重身、相手に先をさせる、相手の太刀筋の真下に入る、「打つに打たれ、打たれて勝つこと」、相手の太刀筋を軸に回転して勝つ。「身懸り五箇の事(身を一重に成すべき事・敵のこぶしに吾肩にくらぶべき事・身を沈にして吾拳を楯にしてさげざる事・身をかかりさきの膝に身をもたせ跡のえびらをひらく事・左のひじかがめざる事)」「機をみる」「下の作り」

>直心影流の技法

真歩、阿吽の呼吸、瞬きをしない、気合(声)をだす、相手に正対する、相手に対して遅速なく合わせる、春夏秋冬のイメージをもって組太刀を実施する、非打(自分自身の非を切る)、茶巾絞り、気剣体一致
 (※) 法定はゆっくり使い、鞆之形はかるやかで素早く使う。一挙手一投足にすべて意味が付与されている。

>試合剣術の技法

切手、止手、突き手、面打込、打込籠手、左片手突、両手突、一間三足、常歩の如く歩む、目見の作用をよく知るべし、「天賦の形」、「形正しければ求めずして其の動作は意の如くなるべく、極りなき変化に涉りて、其の蘊奥を窮むること必ず速なるべし」、形のこと、足幅のこと、體くばりの事、構への事、場間の事、勝ちがたきに勝つべきこと。

(※) 気剣体一致

「流儀にては一円を○形と尊びて熟練の形ちとなる事、修行の角菱取れて、何方へも差しつかへず通りて変化自在なる処にて、是を常に気剣体一致と教えて、その形は体と太刀と一致に連れて離れ離れにならず、まん丸になる処は少しも透間なく、心も又丸く、身体へ一杯になる時は、内十分に実して虚なくして、是こそ平日教ふる気剣体一致の一円と云ふもの也」(直心影流窮理之巻)。現代剣道の「一本」を成立させている要件となっている。

(2) 型からの学び

関係性の認識 間合・気合・理合

(3) 「勝負」からの学び

攻め→場の成立→生機→勝負→残心

「一本」自体が進化・深化・新化する

気剣体一致した「一本」に剣道の不易(いのちの本質)をみる。

4 まとめ

心と体の間・自分と他者の間・個人と大自然の間にハタラク力を感得することが課題

「肚」のすわった人間づくり=退かない・恐れぬ・凝らない身心を養成する

「勝負」を介した身心技法の体得

以上

剣道コラム

No.2

急がれる道場へのAEDの設置

齋藤 実 (専修大学)

平成12年9月に文部省から「スポーツ振興基本計画」が出されました。それでは、「心身の両面に影響を与える文化としてのスポーツは、明るく豊かで活力に満ちた社会の形成や個々人の心身の健全な発達に必要不可欠なものであり、人々が生涯にわたってスポーツに親しむことは、きわめて大きな意義を有している。」とスポーツの意義を示した上で、「生涯にわたってスポーツに親しむことのできる社会、すなわち『生涯スポーツ』の環境づくりを目指すこと」が目標として掲げられています。そのなかで特に剣道は注目され、生涯にわたって目標をもって続けることのできる既存のシステム（昇段、道場の考え方、少人数で実施できる、世代間交流が可能など）があることから、生涯スポーツとしての価値は高いとされてきました。また、それに加えて怪我や事故が起こる可能性が小さいと考えられていることも、それをあと押ししてきました。

ところが最近、剣道において死に至るような事故、いわゆる突然死の報告を耳にすることが増えてきました。その多くが、虚血性心疾患、心室性不整脈といった心・血管疾患で、中高年だけでなく若年者の死亡例も報告されています。

スポーツ活動中の突然死の原因は、中高年であれば冠動脈の硬化、心筋の変性（心筋症）、冠動脈口狭窄などがあげられており、若年者であれば肥大型心筋症、冠動脈奇形などがあります。剣道の稽古にはそれらの原因を発現させる要因が多くあると考えられ、稽古による脱水量が他のスポーツよりも著しく高いこと、剣道特有の精神的緊張があること、稽古時に血圧が増加することなどの医学的・生理学的要因を推測することができます。また、剣道を行う若年者の心室肥大の報告も少なくないようです。

実際にスポーツ種目別の突然死危険率（40歳～59歳）によると、ランニングにおける危険率を1とした場合の相対危険率は剣道が2.5倍、続いてスキーと登山がそれぞれ1.9と1.8倍、野球が1.2倍となっています（清水ら）。ニュースではランニング中の突然死をよく耳にしますが、安全と思われていた剣道でその2.5倍もの突然死の危険性があるのです。

心・血管系の突然死の危険性を軽減するためには、やはり道場へのAEDの設置が最も有効な手段になります。AED（Automated External Defibrillator：自動体外式除細動器）は、自動で除細動（心臓の心室が小刻みに震えて全身に血液を送ることができない状態に電気ショックを与えて正常な状態に戻す）を行う器械で、臨床の評価によって除細動器としての安全性と有効性が確認されたことから、日本では平成16年7月から一般市民が使うことができるようになりました。今ではほとんどの公的機関に設置されていますが、数多くある剣道の道場までとなると設置されていないのが現状です。また、公的な施設を利用しているクラブの場合でも、AEDの設置場所を把握していない指導者が多いのではないのでしょうか。

生涯続ける価値のある剣道を、危険性に対する準備不足で中断する結果となることは残念の極みです。剣道の安全性を高めることも、剣道の価値を高めることに繋がる一つの手段と捉え、啓発を進めているところです。

スポーツ種目	相対危険率
剣道	2.5
スキー	1.9
登山	1.8
野球	1.2
ランニング	1.0

スポーツ種目別の突然死危険率（清水ら）



AEDが設置されていても
わかりづらいところにある場合も多い。

事務局からの連絡

平成17年度は、下記の事業を行いました。

1) 総会の開催

下記の日時・場所において総会を開催しました。

日 時： 平成17年9月2日（金）16:00～16:20

場 所： 天理大学 柚之内キャンパス2号棟

2) 指導法研究会の開催

下記の日時・場所において指導法研究会を開催しました。

日 時： 平成17年9月2日（金）16:20～17:20

場 所： 天理大学 柚之内キャンパス2号棟

テーマ： 木刀を用いた剣道指導法 —柳生中学校の伝統・木剣体操—

演 者： 平尾 京一 氏（奈良市立興東中学校 教諭）

3) 研究会の開催

下記の日時・場所において研究会を開催しました。

日 時： 平成17年12月2日（金）18:00～19:30

場 所： 明治大学 駿河台校舎研究棟第10会議室

テーマ： 剣道競技における技の知識の獲得過程

演 者： 奥村 基生 氏（筑波大学）

4) 幹事会の開催

下記の日時・場所において幹事会（4回）を開催しました。

平成17年 5月 21日 工学院大学 新宿校舎

平成17年 7月 9日 工学院大学 新宿校舎

平成17年 12月 2日 明治大学 駿河台校舎

平成18年 3月 25日 国士館大学 多摩校舎

5) 広報活動の活性化

滝井記念武道振興財団より助成金（30万円）を受け、分科会ホームページ（剣道アーカイブ）の英語ページを立ち上げ、4コンテンツを英語化しました。

6) 会報

第4号（2006年春号）を発行しました。

7) 会費の徴収

平成17年度会費を徴収しました。



分科会ホームページ（English Page）

※ 上記の事業報告は、平成18年9月7日開催の総会において承認されています。

平成17年度 剣道専門分科会 一般会計決算書 (平成17年4月1日～平成18年3月31日)

(単位/円)

1.収入の部				
科目	予算額	決算額	増減	摘要
1 会員会費	200,000	188,000	12,000	15年度分:4口, 16年度分:15口, 17年度分75口
2 本部助成金	50,000	50,000	0	学会本部より助成金
3 前年度繰越金	243,026	243,026	0	平成16年度からの繰越金
4 利息	0	3	△3	分科会口座預金利息
当期収入合計	493,026	481,029	11,997	
2.支出の部				
科目	予算額	決算額	増減	摘要
1 研究助成費	60,000	40,000	20,000	分科会企画、研究会への助成
2 広報活動費	100,000	45,870	54,130	広報活動助成(滝井財団事業超過分清算)
3 印刷・消耗品費	40,000	10,960	29,040	事務用品等
4 通信費	50,000	27,660	22,340	郵送料、切手・はがき代等
5 会議費	15,000	0	15,000	
6 交通費	100,000	7,000	93,000	役員交通費
7 傭人費	50,000	23,000	27,000	事務局アルバイト、研究会アルバイト
8 予備費	78,026	0	78,026	
9 次年度繰越金	0	326,539	△326,539	次年度への繰越金
当期支出合計	493,026	481,029	11,997	

平成17年度 剣道専門分科会 特別会計決算書 (平成17年4月1日～平成18年3月31日)

(単位/円)

科目	予算額	決算額	増減	摘要
1. 収入の部				
1 外部助成金	300,000	300,000	0	平成17年度滝井記念武道振興財団助成金
当期収入合計	300,000	300,000	0	
科目	予算額	決算額	増減	摘要
2. 支出の部				
1 広報活動費	300,000	345,870	△45,870	剣道専門分科会ホームページの英語化
当期支出合計	300,000	345,870	△45,870	

※ 決算支出 345,870円の内訳は、ホームページ翻訳料 345,450円と、同振込手数料 420円。

※ 決算支出超過分45,870円は、平成17年度一般会計予算・広報活動費より支出した。

監査の結果、適正であることを証明いたします。
平成18年8月25日
日本武道学会剣道専門分科会

浅見 裕 
袴田 大蔵 

※ 上記の決算書は、平成18年9月7日開催の総会において承認されています。

事務局便り

- 会報第5号（2007年春号）をお届けします。発行が大幅に遅れましたことをお詫びいたします。
- 平成18年度の学会大会時における分科会企画は、東京都剣道連盟常任理事・加藤浩二先生を講師にお招きして、形についての都剣連の取り組みについて、実演も交えて大変貴重なお話を聞くことができました（今号でもとりあげましたが、詳細は『武道学研究』第40巻第1号をご覧ください）。本年度の分科会企画（8月31日、東海大学高輪校舎）は、会長挨拶にもありますように、「剣道指導の心構え」制定にあたって尽力されました作道正夫先生（大阪体育大学）を講師にお招きし、「形と現代剣道」というテーマでご講演いただく予定です。剣道界にとりましてタイムリーなテーマでありますし、是非奮ってご参加ください。
- 本文中にもありますが平成18年度の研究会は、演者の変更もあって早稲田大学スポーツ文化研究所研究会に参加させていただくという形をとりました。このことを縁として、早稲田大学スポーツ文化研究所研究会や日本スポーツ人類学会研究会サロンのご案内をいただくようになり、武道学会HP上や剣道分科会HP上においてご案内させていただきました。今後も他学会との情報交換を密にしていきたいと考えております（分科会HPの「研究会報告」と「他学会情報交換」を更新しました）。
- 幹事会において、いかに研究会を活性化していくかということが毎回話題になります。これまで気鋭の若手研究者をお招きして、非常に良い刺激になるご発表をいただけてきましたが、参加者が少ないのが残念です。本年は、11月上旬（全日本剣道選手権の前後）を第1候補日として研究会の開催を計画しています。とくに若手の会員の方の参加をお待ちします。
- 研究会とは別に、若手研究者の育成を主眼として、先生方所属の大学における大学院生の修論・博論等をデータベース化しようというアイデアが出されています。その際には情報提供のご協力をお願いしますので、よろしく願いいたします。
- 本年度総会においてご報告させていただく予定ですが、平成18年度の会費収入が、平成17年度に比して48,000円（24名分）の大幅減となっております。17年度は、幸い外部の助成金（滝井記念武道振興財団助成金）を活用して広報活動の活性化（ホームページの英語化）を行うことができましたが、こうした外部資金も恒常的に獲得できるものではありません。より充実した、研究助成や広報活動活性化を行うためにも、会費納入について先生方のご協力をお願いいたします。

（文責：事務局・長尾）



日本武道学会剣道専門分科会事務局

〒168-8555 東京都杉並区永福1-9-1 明治大学和泉校舎研究棟・長尾進研究室内

TEL 03-5300-1156 FAX 03-5300-1203

E-Mail : nagao@kisc.meiji.ac.jp 分科会HP <http://www.budo.ac/kendo/>